

令和 3 年 6 月 18 日現在

機関番号：32682

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2020

課題番号：17K03192

研究課題名(和文) 近世ロシア帝国に生きた民族の軌跡と記憶についての研究

研究課題名(英文) A Study on the History and Memory of an Ethnic Group Living in the Early Modern Russian Empire

研究代表者

豊川 浩一 (TOYOKAWA, KOICHI)

明治大学・文学部・専任教授

研究者番号：30172208

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：民族の意識や記憶がどのように歴史的に形成されていくのかを考察するという研究目標がほぼ達成された。その成果として、2つの論文を刊行した。一つは、バシコルトスタンに存在するモニュメントを通して、どのように民族の記憶と意識が形成されたのかを、プガチョーフ叛乱以前の状況から現在に至るまで約250年間の歴史について検討した。いま一つは、プガチョーフ叛乱のもつ宗教的側面に関して詳しく検討した。また、海外の研究者と積極的な交流を図り、研究の質を高めるべく、ロシア連邦共和国から、17・18世紀ロシア史の専門家を招聘し、上記テーマに関わる共同研究(シンポジウム「ロシアの近代化過程を考える」)を開催した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

上記の研究は、現在の歴史学で重要な課題となっている「記憶」についての研究に寄与するものとなっている。歴史学は史料を用いて人間集団の行為の事実がどうであったのかを考えている。そしてその事実に対する認識が社会の変化や時代の移り変わりとともにどのように変化したのかをも見極めようとするのである。「記憶」という視点を導入することで、より複合的に「変化」を考えることができるようになった。本研究は、具体的にロシアのある民族の歴史的変遷とそのことに対する当該民族の記憶という面から考えることで、この「変化」をより詳細に浮かび上がらせている。

研究成果の概要(英文)：The research goal of examining how ethnic consciousness and memory are historically formed has been almost achieved. As a result, two papers were published. One examined how ethnic memory and consciousness were formed through the monuments that existed in Bashkortostan, from the pre-Pugachev uprising to the present day, about 250 years of history. One examined the religious side of the Pugachev rebellion in detail now. In addition, in order to actively interact with overseas researchers and improve the quality of research, experts on the history of 17th and 18th century Russia were invited from the Russian Federal Republic to hold a joint research on the above topics (symposium "Thinking about the modernization process of Russia").

研究分野：ロシア近世史・近代史

キーワード：民族問題 バシキール人 プガチョーフ叛乱 サラヴァト・ユラーエフ 記憶

1. 研究開始当初の背景

バシキール人の歴史は、ロシア国家に対して服属し忠誠を示す動きとそれに反対して蜂起を繰り返すという独特の特徴を有する歴史とみることができる。18世紀後半のプガチョーフ叛乱は、この問題が一時に表れた特異な事象である。とりわけ民族の英雄とされるサラヴァト・ユラーエフとその父ユライ・アズナリンの行動と意識にそのような動きが明瞭に表れていた。族長として政府に忠実であろうとする父親に従いながらも、最終的に子は父と共に叛乱に積極的に参加した。南ウラルで遊牧生活をしていたバシキール人にとって、この地方へのロシア人による入植と工場建設はその生存を脅かすほど重要で喫緊の課題であった。地方種族の族長であった彼らは、平時にはロシア政府の意向に即した行動をとっていたが、叛乱時には仲間と共にいわゆるロシアの植民政策に抗議して立ちあがることとなった。

2004年6月3日、バシコルトスタンの首都ウファでサラヴァト・ユラーエフ生誕250周年を記念して盛大な学術会議が開催された。共和国を挙げての催しで、当時の大統領M.I.ラヒモフ(2010年解任)も開会の辞を述べたほどである。これと前後して多数の民族英雄に関する書籍が刊行された。本研究者も、2014年6月、ウファでの国際学術会議「歴史的・文化的広がりにおける個人の役割(バシキール人の民族的英雄にして即興詩人サラヴァト・ユラーエフ〔生誕〕260周年に寄せて)」に参加し報告を行なった。現在、バシキール人はこの叛乱に参加した自民族の英雄の動向について極めて強い関心を持っている。その根底には、ロシアとの関係性についての複雑な思いがある。それが、ウファ市に一見すると相反するような二つのモニュメントが共存することとなって現れている。しかし両者の関係は決して相容れないものではない。つまり、バシキール人とロシアの関係は、一方的に「自発的な併合」でもなく、また一方的に「民族解放運動」でもない。この複雑な関係性こそがバシコルトスタンの歴史を考える上で重要であるが、ロシアはもとより、バシコルトスタンの歴史学もそれについて明確な答えを出していない。それは現在のロシアとの関係の在り方そのものであるといつてよい。最近刊行された概説『バシキール民族の歴史』第3巻(ウファ、2011年)を見ても、民族英雄の動きについては詳述されているものの、民族意識を形成する上で果たした彼らの役割については述べられていないのである。そこにはロシア史学(そしてロシア)を意識して、民族性を強く表明できないというバシコルトスタン史学の問題が内包されているのであろう。それゆえ、サラヴァト・ユラーエフ親子の行動が、その後の民族の記憶をどのように形成し、かつそのことがいかに民族意識の形成の上で役割を果たしたのか(あるいは果たさなかったのか)という問題を、バシキール史・ロシア史両者の動きを念頭に置きながら検討するのが本研究である。

なお、本研究を考える上で有効なのが、1990年代以降、フランスの歴史学界で頻繁に使われるようになった「記憶」という考えである。そこでの議論は国民国家の形成について、従来の批判的視座として提出された「伝統の創造」論(エリック・ホブズボーム)や「想像の共同体」論(ベネディクト・アンダーソン)とは異なり、「集合的記憶を表象する場」(ピエール・ノラ)を重視するというものであるが、「国家」を形成することのなかったバシキール人の歴史のなかで、一体何が民族の「記憶」に留められ、また何が「忘却」されたのか。19世紀以降のバシキール人は自民族の意識形成をどのようになしていったのか。この点の検討が本研究の中核部分となる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、民族の記憶や意識がどのように歴史的に形成されていくのかを考察することである。ロシア連邦バシコルトスタン共和国の首都ウファにはロシアとバシキール人の関係を示す二つのモニュメントがある。一つはバシキール人のロシア国家への「自発的併合」400周年を記念して建てられた「民族友好記念碑」であり、いま一つは民族の英雄サラヴァト・ユラーエフの馬上像である。前者はバシキール人とロシア国家の関係が常に「友好的」であることを示そうとしている。後者は18世紀後半のプガチョーフ叛乱に積極的に参加してロシアが推進した植民政策に反対した民族の英雄の像である。友好とプロテストというロシア国家にとり相反する対応を示す相関関係のなかで、この民族英雄についての記憶がどのように扱われてきたかを検討する。

3. 研究の方法

本研究では、モスクワ・ウファ・オレンブルクの古文書館での史料調査を主とし、また同地の研究者たちとの意見交換を通して、本研究申請者が提示する民族の記憶に関する研究方法やそこから導き出される概念の検証が重要となる。このため、あらゆる機会を通して、研究方法や概念について申請者の考えを開陳していくことになる。国内外における論文発表や研究報告という形をとるだけでなく、セミナーや授業などを通して、広く研究者や院生・学生にも研究成

果を提供し、彼らからも意見を求め、本研究者の見解を検証する。

4. 研究成果

2017年度は次のようなことを行った。第1に、先年行われた国際学会での報告の英語論文化である。これは翌年度学術論文に掲載されることになる。第2に、研究の精度を高めるための方法についてである。2017年4月28日、多くの教員も参加する大学院授業文化継承学で「記憶すること、歴史を叙述すること バシキール人のアイデンティティ形成」というテーマでその概要を報告し、参加者の興味を惹き、またたくさんの質問を受けた。第3に、報告内容の検証についてである。2017年8月にはアルメニアへ出張し、20世紀初頭の民族浄化の歴史およびその記憶について、現地調査も含めて、ツァトゥーリヤン教授より本研究者の質問に答えていただき、更には様々な問題について教授していただいた。2018年3月にはロシアへ出張し、モスクワの国立図書館および歴史図書館、さらに古法文書館での史(資)料調査を行った。第4の外国人研究者との研究交流による研究の進展を図ることについても成果があった。18世紀ロシア史の専門家ペトルヒンツェフ教授と話し合いさまざまな助言を受けた。またバシコルトスタン法制史の専門家からも18世紀バシコルトスタン史について示唆を受けた。さらに2016年に刊行した拙著『18世紀ロシアの「探検」と変容する空間認識』に対して『駿台史学』163号で、バシキール人の意識の問題を取り扱ったものとして、好意的な書評を受けた。

2018年度には、第1に、論文として学術雑誌に掲載された。“The Strategy of I.K. Kirilov toward the South - East Russia,” *Cross-Cultural Studies: Education and Science*, Vol. 3, Issue II, June 2018, pp.7-20. (査読有)である。第2、研究の進捗状況に関して国際的な観点からレビューを受けるための方法についてである。上記の論文を基に *The Academic Expeditions in the Eighteenth Century Russia and the Changing Space Recognition: The Strategy of I.K. Kirilov toward the South-East Russia* というテーマで、国際学会 Study Group on Eighteenth-Century Russia: X International Conference (2018年7月6~11日、ストラスブル)で報告した。第3、報告内容の検証について。2019年1月と3月の2度にわたりロシアに出張をして、モスクワにある国立図書館および歴史図書館、さらに古法文書館(RGADA)での史(資)料調査を行った。それによって、報告内容についておおむね正しいことが証明されたものの新たな問題点も見いだされ、その点について検証した。第4、外国人研究者との研究交流による研究の進展を図ることについて。18世紀ロシア史の専門家である上述のペトルヒンツェフ教授およびモスクワの古法文書館館員エルモラーエフ氏から、バシキール人の民族英雄の記述について新たな見解を得ることができた。

2019年度は、第1に、実施計画の国際学会での報告と学会誌への論文投稿である。国際学会で、「プガチョーフ叛乱に対する日本人歴史家たちの見解 プガチョーフ叛乱における古儀式派」というテーマ(於「国際学術プーシキン報告会」: オレンブルク、2019年6月6日)で報告することができた。また、論文の投稿については、「記憶すること、歴史を叙述すること - ウファーにあるふたつのモニュメントが語るもの」『駿台史学』169号、2020年3月、67~100頁(査読有)および「18世紀ロシアの民衆運動における古儀式派 - プガチョーフ叛乱における古儀式派教徒の役割」『明治大学人文科学研究紀要』第87冊、2020年3月、47~87頁(査読有)以上2論文を刊行することができた。とくに前者の論文は、本研究の総括的な論文である。そこでは、バシコルトスタンに存在するモニュメントを通して、どのように民族の記憶と意識が形成されたのかを、プガチョーフ叛乱から現在に至るまでの250年間にわたって考察した。後者の論文では、宗教的側面に特化して詳しく検討した。第2に、海外の研究者と積極的な交流を図り、研究の質を高めることである。また後者の論文は、次の研究への橋渡しとなる論文である。2019年6月、ロシア連邦共和国から、すでに述べた18世紀ロシア史の専門家ペトルヒンツェフ教授を明治大学に招聘し、上記テーマに関わる共同研究(シンポジウム「ロシアの近代化過程を考える」於: 明治大学、2019年6月22日)を行なった。第3に、研究のレビューを受けることである。2019年夏に開催された北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター主催の国際シンポジウムに参加し、国際的な視点からさまざまな指摘を受けた。

2019年度末に、2020年から世界的に流行した新型コロナ・ウィルス感染症拡大のため、研究終了の延長を願い出て許可された。そのため、日本で開催された研究会に参加してそのコメントーターを務め、本研究を深めることができた。加えて、日本の学会誌に、2019年6月に明治大学に招聘したペトルヒンツェフ教授のシンポジウムでの講演を土台にした論文を翻訳して刊行することができた。

まず日本の研究会への参加とコメントについてである。2020年10月31日、早稲田大学ロシア東欧研究所主催の研究会で、越村勲「義賊の原初形態と近世帝国の成立: ウスコク モルラク、ハドゥックそして・・・~拙著 USKOK AND WAKO / Uskok i Wako (Zagreb, 2020) より」に、コメントーターとして報告内容に対して発言した。また越村勲教授とのやり取りによって、クロアチアの研究状況を知ることができた。さらに、私のプガチョーフ叛乱に関する研究を基礎にして、クロアチアの研究者との意見交換へと向かう道が開かれ、今後の研究の発展につながった。

また、2019年6月22日に私が組織したシンポジウムでのペトルヒンツェフ教授の基調講演を

基礎にした論文を刊行した。それが「二つの近代化された軍事改革とロシア社会への影響」(『駿台史学』171号、2021年2月)である。これはシンポジウムで好評を博した講演であり、また近世ロシア社会を理解する上でも重要である。それゆえ、日本におけるロシア史関係者以外の方々にも周知するために、教授に新たに書き直してもらった論文を送ってもらい、それを翻訳したものである。この翻訳論文に対して、すでにロシア史研究者のみでなく、ドイツ史研究者からも好意的な評価およびヨーロッパ史においても共通する重要な論点の提示が多くみられるとの指摘をいただいた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 5件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 豊川浩一	4. 巻 169号
2. 論文標題 記憶すること、歴史を叙述すること ウファーにあるふたつのモニュメントが語るもの	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 駿台史学	6. 最初と最後の頁 67、100
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 豊川浩一	4. 巻 187冊
2. 論文標題 18世紀ロシアの民衆運動における古儀式派 プガチョーフ叛乱における古儀式派教徒の役割	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 明治大学人文科学研究所紀要	6. 最初と最後の頁 47、87
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 豊川浩一	4. 巻 971
2. 論文標題 ロシア帝国の空間形成 南東ロシアにおける要塞建設の背景	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 歴史学研究	6. 最初と最後の頁 36、47
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 豊川浩一	4. 巻 Vol. 3, Issue 11
2. 論文標題 The Strategy of I.K. Kirilov toward the South-East Russia	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Cross-Cultural Studies: Education and Science	6. 最初と最後の頁 7、20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 豊川浩一	4. 巻 162
2. 論文標題 18世紀のロシアにおける民衆と宗教 ピョートル一世の教会改革と古儀式派教徒	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 駿台史学	6. 最初と最後の頁 67-100
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 3件)

1. 発表者名 豊川浩一
2. 発表標題 : (プガチョーフ叛乱に対する日本人歴史家たちの見解。プガチョーフ叛乱における古儀式派)
3. 学会等名 : (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 豊川浩一
2. 発表標題 The Academic Expeditions in the Eighteenth-Century Russia and the Changing Space Recognition: The Strategy of I.K. Kirilov toward the South-East Russia
3. 学会等名 Study Group on Eighteenth-Century Russia: X International Conference (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 豊川浩一
2. 発表標題 : VIII .:
3. 学会等名 : (国際学会)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

2017年4月28日、大学院授業文化継承学で「記憶すること、歴史を叙述することーバシキール人のアイデンティティ形成」というテーマでその概要を報告した。教員や院生の興味を惹き、またたくさんの質問を受けた。
18世紀ロシア史の専門家ペトルヒンツェフ教授を明治大学に招聘し、上記テーマに関わる共同研究（国際シンポジウム「ロシアの近代化過程を考える」於：明治大学、2019年6月22日）を行なったが、これ以外に、学生を対象に近世ロシアの諸問題について2回の授業をし、学生たちの関心を惹いた。

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 シンポジウム「ロシアの近代化過程を考える」	開催年 2019年～2019年
---------------------------------	--------------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------